

学生を育てるということ

——臨床心理学的視点からの考察——

甲南大学学生相談室 高石 恭子

I. はじめに

ここ数年、筆者は「育てること」をめぐる、さまざまな研究、調査、臨床の実践などに携わってきた。自らが女性であること、子育てに奮闘していることから、公的な子育て支援を考える委員の役割を与えられたり、インターネット・サイト上の子育て相談を担当するといった経験もしている。

それらの経験のなかで、改めて実感したのは、筆者が学生相談の現場で近年しばしば出会う、一群の“社会に出て行きにくい”青年たちが抱える困難と、乳幼児期の子育ての現場で起こっている今日的な困難とは、同じ構造と背景をもっているのではないかということであった。もちろん、同じと言っても、それは多元的で複雑な問題であり、簡単に論じられるような性質のものではない。しかしながら、容易に答えの出ないのは承知で、自分自身の実感を言葉にし、さまざまな視点や角度から問い続けていく試みを積み上げていくうちに、力づけられる手がかりが見出せるのを願うしかないのではと思う。

何が同じなのかという点については、たとえば本人を取り巻く家族構造の問題を挙げることができる。

わが国で、成人後も社会に出て行きにくい（あるいは現代社会で適応的に生きられない）青年たちがどうなるのかといえば、特別な疾患、障害、反社会的行動などが無い限り、普通は自分の親の家に住み続ける。少子化で、きょうだいの数も少ないから、専用の個室が確保できていることも多い。欧米のように、ヤングホームレスとなって公的扶助の対象になることはあまりなく、彼らの生

活と安全を保障するのは、親、実質的には中年期を迎えた母親である。彼女たちはたいてい、家に居続ける子どもに日々苦言を呈し、自分の子育ては間違っていたのかと悩みながらも、もう少し自分が耐えて頑張れば、つまり良い母親になれば、わが子はある日、颯爽と社会に出て行けるに違いないと信じている。母親自身が描いてきた理想の子どもになってくれると懸命に信じようとする。その姿は、文化的に長く引き継がれてきた、わが子に尽くす自己犠牲的な理想の母親像とも合致するために、周囲からも当事者たちも、それを問題と意識することが難しい。

そして、そのような母子関係にはめったに父親の登場する隙がない。学生相談室を訪れる青年のなかには、もう何年も父親と話をしたことがないと言う学生がめずらしくない。男子学生の場合、特にその傾向は強いように感じられる。おそらく、当の父親に尋ねれば、「話している」と応えるのであろうが、「勉強してるか」「就職できそうか」「将来どうする」といった一方的な言葉をかけられただけでは、子どものほうは「話した」経験になり得ないのである。

このような家族の状況は、子育て相談で出会う、若い母親たちの置かれた状況と基本的に何も変わらない。父親は仕事を理由に深夜まで家庭には帰って来ず、母親は「私さえ頑張れば」と子育ての責務を独りで背負い、何とかしてわが子を自分の思う通りにコントロールしようとする。もちろん、子育てにちゃんと参画しなければならないと意識している若い男性も少なくないが、今日の労働現場の状況は、父親に逃避の口実を簡単に与えてくれる。そして家庭に残された母親は、(子育ての)

教科書に載った模範解答を導き出そうと必死になったり、雑誌に載ったトレンドに合わせようと心を砕き、少しでもうまくいかないと、「私は母親失格だ」と自分を責めるか、「どうしてちゃんとできないのだ」と、わが子に怒りのはげ口を見出してしまふ。反対に、思う通りにわが子が応えれば、「なんて素晴らしい」と賞賛し続ける。罪悪感や恐怖で縛られるか、満たされる万能感に引き止められるか、いずれにせよ、子どもは逃れようのない濃密な二者関係のなかで、母親を支える役割を背負いつつ成長していくことになる。そのような長い時間の必然的結末が“社会に出て行きにくい”（つまり、うまく育つことができない）若者たちの姿だと考えられるのである。

1990年代後半からわが国で人々に認知されるようになった「社会的ひきこもり：精神疾患などの特別な事情がないのに、家族以外と親密な関係をもたず自宅にこもり続ける者」や、2004年以降に問題意識化された「NEET (Not in Education, Employment or Training)：15～34歳の教育、雇用、職業訓練のいずれをも受けていない若年非労働者」についての研究からは、“社会に出て行きにくい”青年の増加が指摘されている。学生においては、「大学不登校」「留年」「ひきこもり」という形で事例化するわけだが、それらについてはいくつかこれまでにも考察してきた（高石：2002, 2003, 2006a, 2006b）。今回、乳幼児の子育て支援の仕事が一区切りつく時期が来たので、この機会に、乳幼児から成人となった子どもまでを含めて、広く「育てる」ということに通底する今日的な課題を整理し、また、大学において学生を育てるという機能の重要性について、臨床心理学的な視点から考察してみたい。

II. 「育てる」とはどういうことか

まず、「育てる」ということを考える上で、三つの前提を確認しておきたいと思う。

一つは、どういう意味で「育てる」という言葉

を用いるかである。

何か自明のことを指しているように、日常語として使われる「育てる」という言葉であるが、各人の了解する内容は、時代によって、使われる文脈によって、その人の価値観によって、相当に大きな幅があると言えるのではなからうか。

たとえば、あるオンライン和英辞書で「育つ・育てる」という動詞を検索してみると、「育つ」という日本語に対する、人に使われる英語の自動詞は2語 (grow, thrive) であるが、「育てる」に対する英語の他動詞 (単語・熟語) は、基本的なものだけで20近く提示される。主なものを挙げると、educate (教育する) がそこに含まれるのは当然として、他に bring up, build into, cultivate, develop, grow, foster, make, nourish, nurture, raise, take care of, uprear など、多種多様な言葉が該当することがわかる。

私たちは、「育てる」と言うとき、身体を成長させる、知的に発達させる、能力を伸ばす、といった上昇と拡張のイメージを無意識に抱えていることがほとんどであろう。しかしながら、育てることは、そのような一方向的な意味づけでは決して語れないのではなからうか。「人間関係を育てる」「信頼感を育む」というときには、英語圏では cultivate が充てられ、「豊かな心を育てる」「個性を育てる」というときには nurture が用いられるように、「育てる」とは、土壌を耕し、養分を与え、発酵するのを待つ（醸成する）といった、下降し、外側からは見えない領域での変化をも意味している。筆者は、「育てる」という言葉のなかに、この“地中”と“下降”のイメージを取り戻すことが重要だと考えている。

二つ目は、「育てる」という営みを単独で切り離して考えるのではなく、人と人との関係において捉え直すということである。

私たち現代人は、主体と対象を切り離して考えることに慣れ過ぎてしまった。科学的思考とはそのようなものである、という信仰が行き渡り過ぎ

てしまった。しかしながら、人が「育つ」とき、必ずそこには「育てる」人が存在する。「育てる」人と「育てられる」人とは分かち難いユニットであり、一方が他方を対象として操作することはできないという圧倒的な事実を、現代人はややもすると忘れてる。育てる者と育てられる者は、相互に共時的に影響を及ぼし合い、育てることによって育てられ、育てられることによって育つという現象が母子の原点にあることを、20世紀後半の新生児・乳児研究は明らかにした。エントレインメント(1)や情動調律(2)といった発見は、その大きな成果であろう。

人が育つことそのものを扱う「発達心理学」の領域においても、近年この“科学的”傾向(子どもを独立した客観的对象として扱い、観察・測定する方法)への反省が生まれつつある。たとえば鯨岡(2002)は、従来の発達心理学が「子どもの誕生から機能的に完成をみる成人までの固体発達過程を特徴づける上ではたいへんわかりやすい」ものでありながら、「育てる」ということを十分に問題にし得ない限界を有するという自覚に立ち、「関係」を入れ込んだ新しい発達心理学の構築を目指そうとしている。発達とは、developmentの訳語であるが、この、上昇と拡張を意味する言葉が子育ての領域を支配するようになって、親たちは「育てること=子どもを速く、能力的に上へと導くこと」に汲々としているのが今日の現状である。そうではなく、育てられる人が「育てる人」にちゃんと育つように、育て-育てられる関係を常に軸に据えて、もう一度発達を問い直してみようとするこれらの新しい動きに、筆者は期待するところが大きい。

以上のような問題意識から、鯨岡(2002)は、「子どもから大人へ」という従来の発達心理学の定式を、「<育てられる者>から<育てる者>へ」という定式に置き換えることを提唱している。

三つ目は、育てることをめぐる、この継時的で実存的な視点を取り入れることである。

育てることを、関係のなかでとらえようとするとき、そこには必ず「育てる人」と「育てられる人」の間の“世代性”という問題が浮上する。私たちは誰でも、大人に世話されなければすぐに死んでしまう弱い存在としてこの世に生まれ、近代化された社会になるほどより長い時間をかけて育てられる。しかしながら、どれだけ育てられる期間が長期化しようと、いつかは、実存的な変化を経て自らが育てる者となり、次世代の成長に力を注ぐことが自然の理として期待されているのである。

現代人は、「育てる」というと、小さく無力な子どもを自立した立派な大人にする、という個体中心の発想をどうしてもしてしまう。結論を少し先取りすれば、今日の晩婚化、少子化の背景には、このような育てることをめぐる価値観が影響しているに違いない。本当は、育てるということの前には、「育てられる人」が「育てる人」に成長するという、大きな質的変容が想定されなければならないはずである。もちろん、それは個々人にとっての“わが子”には限らず、次世代の人、次世代の文化を構成する作品、技術など広い意味で理解すればよいだろう。しかし、このような「世代を引き継ぐ」という意味での育てるという発想のできている人が、いったいどれだけいるだろうか。育てることの前には、育てられる者の実存的な変化があり、「世代を引き継ぐ」という、個としての成長を超えた営みがある。この前提をとりわけ重視して、次に論を進めたい。

Ⅲ. 社会、組織、家族のなかの育てる機能の危機

～ジェネラティビティ・クライシス～

筆者がこの三つ目の視点の重要性を強く意識するに至ったのは、近年の、二種類の事件報道からである。

第一は、思春期を越えた子ども(大半は息子)の親殺しの頻発である。若者論では定評のある斎

藤（2007）は、「青少年の凶悪化」はマスコミの作り出した虚構であると述べるが、主犯が少年で、実父母が被害者となった殺人ならびに殺人未遂事件は、警視庁の発表でも、1996年から2004年の間は年間3～10件の範囲で推移していたのが、2005年には17件に増えたという。また、少年に限らず親殺しの事件を検索してみると、2006年は8月までの時点で、すでに既遂が11件に及んでおり（主犯は、14歳～45歳にわたる）、なかには有名国立大学の学生も含まれていた。本稿を書いている最中にも、2006年末に21歳の浪人生（息子）が、「夢がない」と非難した妹を殺害してバラバラに切断したという事件の報道が目飛び込んできた。これは親殺しではないけれども、「育てること＝子どもを速く、能力的に上へと導くこと」という価値観に支配された家族内で起きた親族殺人という点では、他の親殺し事件と共通する性質をもつと言ってよい。少年や青年は全体として凶悪化してはいないとしても、社会に出て行きにくい（つまり非社会性の強い）子どもが追い詰められて、親きょうだいを道連れにして自滅するという性質の事件は、統計的に有意かどうかは別として、近年増加していると言っても誤りではないように思える。

第二は、2005年から2006年にかけて、わが国の社会を賑わせた、いわゆるITベンチャー第2世代(3)の旗手たちの、粉飾決算や違法取引による逮捕事件である。当時30代の若い成人であった彼らは、強引な企業買収や投資ゲームによって巨万の富を蓄え、「お金を儲けて何が悪い」と居直って中高年世代を震撼とさせた。彼らの論理によれば、より速く、より効率的に、自分に富を集めることは善であり、法的に逸脱していなければ、人と人との関係をいかに損なおうと、何も問題はないということになる。しかしながら、結果的にそのうちの目立った何人かは司法によって裁かれ、社会的生命を大きく断たれることになった。

前者の事件報道は、「親から子へ」という血縁

での“育て一育てられる関係”の破綻を象徴的に表しており、後者の報道は、「年長者から若者へ」という社会的な“育て一育てられる関係”の破綻を象徴的に表しているという点で、両者は共通している。特に後者においては、若者の自己中心性、利己性に対して年長者の非難が強く向けられたことが記憶に新しい。もちろん、若者の側に“育て一育てられる関係”を大切にする姿勢が欠けていたことは確かである。その一方で、年長者（若者の親世代）の側にも、次世代の若者を「育てる」という発想がほとんど見えてこないばかりか、それらの若者たちを徹底的に社会から抹殺してしまおうとする集合的な意図さえ感じられて、筆者には非常にこころ寒い思いがしたのであった。

個人（家族）的な次元で、また集合（社会、組織）的な次元で、「育てる」という機能が危機に瀕している。誰もが「自分が育つこと」、しかも速く、効率的に、上へ昇り詰めることを目指す今日の社会環境においては、育てられる者が育てる者へ変容していく契機を見出すことが非常に難しい。私たちは、「世代性」ということを、単なるギャップや対立としてだけではなく、“育て一育てられる関係”のなかに、もっと組み込んで考えていかなければならない。このことは、現代のわが国において、いくら強調してもし過ぎることはないだろうと思う。

精神科医であり、自身の勤務する大学病院の外來診療経験から、一九九〇年代より子育て困難の女性の増加に注目していた小此木啓吾は、このような意味での育てる機能の危機を、“ジェネラティブティ・クライシス”と呼んでいる（小此木・他、2004）。

改めて言うまでもないが、“generativity”、あるいは「世代性」とは、E.H. エリクソンが人の一生をライフサイクルとして捉えた発達論のなかで、壮年期（若い成人期）に続く、中年期）に獲得すべき危機的課題として用いた概念である。「生成する」を表す generate と「世代」を表す generation

を加えたエリクソンの造語であり、わが国のテキストでは「生殖性」「生産性」などと訳されている場合も多いが、正確には、「世代継承性」もしくは「生成世代性」等と置き換えねばならないだろう。その意味するところは、それまでの人生で得てきたものを次世代に伝えること、他者のために生きること、他者を生かすことである。この課題の達成は、前述した鯨岡（2002）の言う、育てられる者から育てる者への「コペルニクス的転回」と同じ局面を指しているだろう。小此木は、今日のひきこもり、児童虐待、うつ病といったさまざまなこころの病を引き起こしている根底にあるのが、このジェネラティビティ（彼は<次世代を育む心>という訳を充てている）の危機だと指摘している。

エリクソンは、人生の8つのサイクルにおける危機的発達課題を、すべて二項対立で提示しているが、壮年期における“generativity”の対になっているのは、“self-absorption”である。この用語もまた「自己陶醉」「停滞」などと訳され、日本語にすると本質を掴みにくい言葉である。その意味するところは、この時期に「次世代を育てる」存在に変容できなかった者は、自己完結的に自分を生きるしかないということである。自分を生きる存在から、他者を生かす存在へと変容できないという挫折である。その究極の結末は、近年の、増加する中高年の自殺問題のなかに見て取ることができるのではなかろうか。戦後の日本の経済成長を牽引してきたこれらの世代の人々（昭和一桁生まれ世代から、団塊の世代前後まで）は、長い歴史のなかで、この世代に特徴的なずっと右肩上がりの成長（自分が発展的に生きること）を目標に生きてきた。その成長イメージが個人レベルでも社会レベルでも実現の限界に達したとき、ジェネラティビティの危機が高まり、今やあちらでもこちらでも、中高年と青少年の間の育て一育てられる関係の破綻が事件化して、私たちの不安を掻き立てているのだと言えるだろう。

IV. なぜ学生を「育てること」が難しくなったか

～イニシエーションの消滅～

中高年の世代がジェネラティビティの危機に瀕したとき、その子ども世代の若者が育つことに困難を抱えるのは当然の成り行きである。教育機関として、学生を育てることをその使命の一つにもつ大学においても、青年期の学生を育て上げ、社会に出していくことが、近年非常に難しくなっていることは、大学教育にかかわる者の強く実感するところであろう。

なぜ、学生を育てることが難しくなったのか。その本質的な要因は、決して「大学全入時代」が到来して、入学してくる学生の質が多様化したからとか、ゆとり教育で学力が不足しているからとか、幼少期からIT機器に囲まれて生きる力が損なわれたからとか、そんなところにあるわけではない。それは、「下降」を含めた育てるという意味において、「育て一育てられる関係」のなかで、次世代を「育てる者」になるよう育てるという、先に挙げた3つの前提を含んで考えるような教育の価値観が、大人から失われてしまったからなのではないかと思う。

近年、大学1年生は「高校4年」と揶揄され、さらには「小学13年生」とたとえるメディアも現れるほど、大学生は“育っていない”と批判的に取り上げられることが多い。では、大学1年生になるまでの「育て一育てられる」関係はどうなっているかということ、これがかつての思春期とは異なり、「早く、上へ」発達させようとする大人の子育て観に基づいた、ひたすら直線的な過程なのである。

筆者は、今日の思春期（中学～高校生）の子どもを育てることを最も難しくしている要因は、「イニシエーションの消滅」にあると考えている。

近代以前の社会では、またわが国でも、地方の共同体においては戦後間もなくまで、人生の節目をうまく通過させるための装置として、さまざま

な通過儀礼が執り行われていた。イニシエーションとは、それらの通過儀礼の心理的な側面に焦点を当てたときの、宗教学、臨床心理学などの領域で用いられる言葉である。イニシエーションの基本的な儀式的構造は、日常の生活場面から当人を引き離し、森や浜辺といった、非日常の籠もりの場所へ隔離して一定の試練を与え、それを通過した者を“生まれ変わった新しい実存的人間”としてもとの日常に迎え入れるという、三段階を成しているとされる。

「近代世界の特色の一つは、深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだとよくいわれる」と、宗教学者のエリアーデ（1958）がその書の冒頭で述べたように、今日では特別な宗教集団へのイニシエーションを除いて、実存的条件が変わるような通過儀礼は、どの社会においてもほとんど見られなくなっている。しかし、近代以前の社会では、最も重要な通過儀礼として、思春期のイニシエーション（puberty initiation、すなわち成人式）がすべての構成員に義務付けられていた。わが国でも、「若衆宿」などという名で知られる特別な場所が設けられ、一定の成熟に達した若者たちが集められて、その共同体で大人として認められるための教育を年長者から受ける慣わしがあったことが知られている。思春期のイニシエーションを終えると、若者は髪型や、名前や、衣装を変えて、共同体の人々から大人になった“別人”として迎え入れられた。

それに対して、イニシエーションが消滅した今日では、思春期のプロセスは生理的な変化として、もしくは親や社会への反抗期としてしか意識されず、実存的变化が起きるような経験にはなり得ない。成長の節目をいつ越えたか、越えていないのかわからないまま直線的な時間が経過していくのが、今の中学・高校生の心理的な現実なのである。大学生になったからといって、急に「大人」に育つはずもない。「小学13年生」とは、視覚的に別物となすをいえば、物質的に豊かな環境のなか

でひたすら食べ続け、さなぎにならないまま巨大になった、傷つきやすい“あおむし”である。ただ、彼らは、自ら好んで“あおむし”を生き続けているわけではない。さなぎになり、チョウになるという、実存的な変容の機会を社会から与えられていないのである。

それならば、大学教育の場に、制度としてのイニシエーションを復活させればよいかということ、ことはそう単純ではない。イニシエーションとは、単に試練を課せば成立するというものではないからである。エリアーデ（1971）が、「どんな未開社会も一つの首尾一貫した神話的伝承群、『世界観（コスモロジー）』を持っている。そしてイニシエーションの過程で修練者に対して徐々に啓示されるのはこの概念なのである」と指摘したように、イニシエーションは超越的な存在を前提とした「コスモロジー」と不可分に結びついている。試練を与えるのは、この超越的な、聖なる存在への畏怖を植えつけるために必要とされたからである。今日の教育の場に、そのような宗教性をもった世界観がもはや命脈を保ってはいないことは、明らかであろう。

そもそも、なぜ近代社会においてイニシエーションが消滅していったかといえば、それは前近代のコスモロジーが消滅したからである。前近代の人々は、さまざまな文化のもつ神話に語られている通り、神が創造した“最初の時”が最も完全であると信じていた。だからこそ、人間は何度も死と再生の儀式（イニシエーション）を繰り返すことによって、始原の時に戻り、神の力に触れ、生まれ変わろうとする。そのサイクルこそが、人が「育つこと」であったわけである。

一方、近代以降のコスモロジーとは、人間は“個”として発達し、時間と共に成長していくという直線的なものである。とりわけ、西欧のキリスト教文化圏においては、個人が努力し、少しでも神に近づくよう自分を高めていくのが「育つこと」であり、最高に自分を高めたところで肉体の

死を迎え、最後の審判を経て、魂が天国で永遠の生を生きるというのが、理想的な人生観となった。このようなコスモロジーにおいては、死んで最初の時に戻り、生まれ直すといったサイクルに意味はない。当然の帰結として、イニシエーションは必要のないものになり、捨て去られていく。

「少しでも速く、上へ」という発達観、成長観は、近代のコスモロジーのなかに生まれたものである。わが国では、戦後、このリニアな発達観、成長観のうち、“死後”の部分を除いて、現世に生きている間の部分だけを取り入れた。鯨岡が批判する、「従来の発達心理学」は、まさにこの価値観に従った学問として、一定の成果を収めたことは誰しも認めるところであろう。しかしながら、人生の平均寿命が50年から80年へと急速に伸張した20世紀後半には、乳幼児心理学、児童心理学、青年心理学と、時期を細分化して個体が大人になるまでの過程を定式化してみせるだけでは、私たちが生きていくうえで十分役立たなくなってしまった。「生涯発達心理学」という研究領域が新たに生まれ、その理論的基盤にエリクソンのライフサイクルの考え方が導入されたのが、1980年代～1990年代のことである。環境破壊や有限な資源の問題が地球規模で意識され、物質のリサイクルへの関心が高まったこの時期に、人生もリニアではなくサイクルとして考えようという反省が生まれたわけである。

ただし、西欧の近代化以降、何百年の歴史のなかで培われ、わが国ではとりわけ戦後の2世代が引き継いできた「リニアに成長するコスモロジー」は、私たちの無意識の層にまで深く刷り込まれており、自覚することは相当に難しい。たとえば、筆者は担当する心理学関連の講義のなかで、ライフサイクルについて学生に教える機会を与えられているが、学期の初めに「自分の一生のイメージを1本の線で描いてみよう」という課題を出すと、多くの学生は右肩上がりのリニアなモデルを示す。もちろん、誕生の時が最高で、だんだん右肩下が

りというものもあれば、迷走型、渦巻き型、円環型、横一直線型など、さまざまなイメージを描く者はいるが、最も多いのは右肩上がりであり、さらに付け加えると、最後の死の直前で急降下するというイメージなのである。

先にも述べたが、戦後のわが国は、西欧キリスト教のコスモロジーが当然の前提としてもっている、“死後は救済されて神の国に生きる”という部分を捨象し、現世に生きている間だけの右肩上がりの成長観を信仰してしまった。その結果、私たち今日の日本人は、右肩上がりの“結末”をうまく解決することができないでいる。学生たち（大半は20歳前後の青年）は、「速く、上へ、昇って行って、結局どうなるの?」という問題の答えを与えられないまま、先へ先へと急がされているのである。途中で、その問題にはたと気づいた者は、立ち止まるか、上昇のラインから外れてさ迷うことになる。「大学不登校」や「社会的ひきこもり」の青年のなかには、このようなコスモロジーの問題に直面した者たちが含まれているのではなかろうか。

V. 死を視野に入れた「育てる」ということ

戦中生まれ、戦後育ちである現在60代の鯨岡(2002)は、“社会に出て行きにくい”今日の青年たちの問題の要因を、次のように描写している。すなわち、「一昔前までは、社会人になるということは自分を社会に合わせるというという側面をもっていたから、職業を天職と考え、就職をアイデンティティ達成の一つの要素をみなすことが可能だった」が、今日では「自分の自己実現に就職先が合っているかどうかというように、自分に仕事を合わせるような傾向があるように思える」。バブル経済が崩壊して以降のわが国の社会では、自分に合わせて仕事を選べるような余地は非常に少ないから、多くの青年が社会に出られないか、部分的な参加に甘んじ続ける現象が起きる。続け

て、鯨岡は、「それはおそらく、青年たちがいまにいたるまでのところで、つまり私たち旧世代の〈育てる者〉の側がその『育てる』過程で、何かの手違いを起こしたからに違いない」と述べ、その手違いの中身とは、育てられる者のところの中核にある、健康な自己愛を深く傷つけたことではないかと分析している。

本稿で、自己愛の問題に深く立ち入ることはしないが、発達心理学者のなかでも、実際に乳幼児の子育ての相談に実践的にかかわってきた鯨岡の言葉には、それなりの説得力がある。幼いうちに、育てる者が育てられる者を一個の主体として尊重し、健康な自己愛を十分に満たす過程があってこそ、子どもは自己完結（self-absorption）を免れ、他者を育てられる者へと成長していけるのであって、「速く、上へ」と急かされてきた子どもには、その変容が難しい。傷ついた自己愛と、社会的ひきこもりには密接な関係があることは、臨床心理学、精神医学の領域で、つとに指摘されている通りである。

学生が「社会に出て行きにくい」という問題にもどると、「社会に出る＝就職する」ということは、これも一つの、実存的な変容を意味する。社会のなかで庇護され、モラトリアムを許される立場から、社会で何かを生み出し、社会に還元していく立場になるという、質的な転換を伴うからである。一昔前までの「就職」のイメージは、入社式、新人研修といった、イニシエーション的性質をもつ移行期を含み、その期間に社訓や社の歴史を学んで年長者から育てられ、社会人に生まれ変わっていく機能がまだ残存していた。しかしながら、今日の「就職」のイメージは、「即戦力としてすぐ仕える人間だけが必要」という、効率性を推し進めたものであり、「育て一育てられる」関係のなかで社会人になっていくというしくみが、ますます失われている。社会や組織の中核にいる世代の人々のなかに、「育てる」という意識がますます希薄になっている。上の世代は「自

分たちは自分を育ててきたのだから」、次の世代も「自己責任で自分を育ててから社会に出て来い」と要求するようなものである。そして、社会は大学へ、大学はそれ以前の学校教育に、学校は家庭に、「育てる」という機能の責任を転嫁しようとしているのが、今日の「育てること」をめぐる状況ではないかと筆者には感じられる。

実際、「育て一育てられる関係」という視点は、人生のあらゆる局面において、あらゆる場面において、取り戻すことが必要なのではなかろうか。社会に出るといふ局面の前に、たとえば学生相談の専任として長く実践をしてきた鶴田（2006）は、学生期を「知識の消費者から生産者への移行」というキーワードで理解しようと試みている。学生時代は、単に社会人になる上で有利な資格やマナーや知識を身につけるための期間ではない。与えられるものを消費するだけでなく、次世代の人々が生きていく上で役に立つ新しい“知”を生み出す立場に、実存的に生まれ変わるための移行期なのだといふ捉え方を、大学教育にかかわる者は、自身の教育観のなかにしっかりと根付かせる必要があるだろうと筆者も思う。

この、「サイクルのコスモロジー」で人生を考えるということ、「育て一育てられる関係」や、世代性を重視することは、突き詰めれば「死」を視野に入れて「育てる」という営みを考えるということの意味する。育てることの先には、物理的な個体の死があるのはもちろん、それぞれの人生の節目に、赤ん坊としての死、子どもとしての死、青年としての死、生産者（生殖者）としての死、とさまざまな象徴的な死の経験が待っている。また細胞のレベルで言えば、人間も他の動物と変わりなく、日々死んで生まれ変わるというサイクルを生きているわけである。

一般的に言って、今日の私たちが、いかに「死」を忘れて（心理学的に言えば否認という防衛機制をはたらかせて）生きているかは、大学という教育の場においても切実に思い知らされる。

たとえば、前述した「ライフサイクル」を扱う授業のなかで、筆者は学期の最後に自分の「故人略歴」を書かせるという課題を出すことがある。自分の人生を振り返り、また将来のこととしてさまざまにイメージしてみた後で、自分の「死」の場面を想像し、その葬送の場で誰かに弔辞を読んでもらうという設定のもと、自分の一生を要約してもらうのである（身近な人の死を経験した直後であったりして、課題に取り組むことが難しいという者には強制しないことを伝えている）。死亡時の年齢、死因、生前の功績、やり残したこと、葬送のあり方、死を悼んでくれる人は誰か、などを文章完成式式に書き込むようになっている。そのときの、学生たちの反応は、大半が「自分の死なんて、考えたこともない！」という困惑である。その反応に、教える側の筆者のほうが困惑してしまうほどである。

今年度、160名余りの学生に、自分の故人略歴を書いてみた感想を求めたときの主な反応は次のようなものであった。「難しかった」「暗くなった」「陰うつな気分になった」「書いた内容が事実になるのではないかと不安になった」「縁起が悪い」「嫌な気持ちがあった」「考えたくないことだ」「悲しかった」という否定的なものが、一番多くを占める。「生まれて初めて考えた」「不思議な気持ちがあった」という中立的反応が次に続き、「面白かった」「楽しかった」という肯定的な気持ちを書いた者は、一部にとどまった。なかには、この課題をきっかけにして、“初めて”家族で死と葬送のことを話し合い、自身の親がどのような死生観と、葬送の希望をもっているかを知ることができたのが収穫だったと述べた学生もいた。大勢の人々が瞬時にいのちを失った、阪神・淡路大震災からほぼ12年を経て、被災地の大学に学ぶ学生においても、「死」は再び、自分たちのコスモロジーから消し去られていっているように感じられる。

物理的な死、象徴的な死はともに、私たちが生きていくこと、育て一育てられていくことのなか

に最初から含まれている。死それ自体は、忌み嫌われるような、否定的なものではなく、在るものとして最初から在るのではなからうか。その生と死のサイクルを采配する超越的な力を、神としてイメージするのか、機械的偶然としてイメージするのか、それは現代においては個々人の選択に委ねられていると言える。私たちはもう、国や共同体すべての構成員が信仰できるような宗教をもたないからである。一度消滅してしまった近代以前のコスモロジーを、そのまま再生することは不可能であるし、またする必要もない。

しかし、今日の「育てる」ことに通底する困難な問題に目を向けるなら、日本人が近代以前にもっていた、サイクルのコスモロジー（先祖に迎えられてあの世に行き、また生まれ変わってこの世に誕生するという循環する死生観）と、戦後西欧から取り入れたりニアな（しかも死後を切り捨てた）コスモロジーとを、もう一度見直し、個々人のなかで解決を図っていくしかないのは確かである。何よりも、まず「育てる者」としての私たち一人ひとりが、死を視野に入れた「育てる」ことを考え、実行していかねばならない。

VI. おわりに

いろいろと述べてきたが、筆者の言いたいことを要約するとこのようになる。今日のわが国では、制度としてのイニシエーションが消滅し、死を排除した、右肩上がりの成長する人生イメージが人々の無意識にも深く浸透しているが、そのようなニアなコスモロジーを見直し、死を入れ込んだサイクルとしての人生イメージを大切にすることが、学生を育てるということにおいても求められているのではないか。

昨今の大学では、社会の要請に従って、ますます学生にも教職員にも効率を求め、どうやって速く社会に送り出すかに躍起になっている。本学では数年前から、半期15回のカリキュラムを厳密に消化するために、祝日にも授業を実施し、当たり

前のように学生たちも教室に集まってくる光景がある。そのような学生たち（すべてではないにせよ）の意識に、「知の生産者になるのだ」という気概が乏しいのはもちろん、教員の側にも次第に現状を消極的に受け入れる雰囲気が広まりつつあることは否めない。学生相談の現場にいと、余裕のないカリキュラムのなかで教員が学生を追い立て、学生が教員に攻撃的な感情を抱くといった、教え—教えられる関係の困難も垣間見えてくる。大学という安全で豊かな土壌を提供し、そのなかで学生たちがそれぞれの時機を得て、芽吹くのを待つといった教育の方法は、ますます通用しない現状がある。

そんななかにあつて、学生相談機関が、個々の学生を「育てる」という営みに積極的に取り組むことの意義は、ますます高まっていると言えよう。まずは、「育てる」という営みの前提そのものを問い直し、「育てる者」としての親世代にもはたらきかけながら、青年たちが実存的な変容を遂げ、彼ら自身が「育てる者」になっていけるよう支援していきたい。日々の面接室や教室における個々の実践の積み重ねが、やがて「育て—育てられる関係」の再生につながっていくことを願う。

注

- (1) たとえば母親が赤ん坊に向かって舌を出して笑いかけると、同調して赤ん坊も同じ動きを見せること。引き込み現象とも呼ばれる。(M. H. クラウス & J. H. ケネル 1979/竹内徹・柏木哲夫・横尾恭子訳 1985『親と子のきずな』医学書院)
- (2) たとえば赤ん坊が負の情動に圧倒されているとき、母親がその気持ちに共感しつつも、安定した情動で赤ん坊を包んで同化し、赤ん坊の情動を鎮静化させるようなはたらきのこと。(D. N. スターン 1985/

小此木啓吾他訳 1989『乳児の対人世界』岩崎学術出版社)

- (3) ITベンチャー第一世代とは、若くて起業した現在40代後半～50代のIT関連会社の先駆的リーダー（孫正義氏など）を指し、第2世代とは、企業買収や投資ゲームに走った30代後半～40代前半（いわゆるホリエモン世代）を、第3世代とは、学生時代にOSのウィンドウズを搭載したパソコンが普及した20代後半～30歳（ソーシャルネットワークワーキングサービス mixi や、巨大掲示板2ちゃんねるの管理者の世代）を指す。

文献

- エリアーデ, M. 1958/堀一郎訳1971 生と再生—イニシエーションの宗教的意義—東京大学出版会
- 鯨岡 峻 2002 <育てられる者>から<育てる者>へ—関係発達の視点から NHK ブックス
- 小此木啓吾・濱田庸子・山田康 2002 <次世代を育む心>の危機—ジェネラティビティ・クライシスをめぐって—慶應義塾大学出版会
- 斎藤 環 2007 若者を育てることの困難 高石恭子編「育てることの困難」人文書院 所収
- 高石恭子 2002 学生相談から見たひきこもりと不本意就学の現状 甲南大学学生相談室紀要第9号 16-28
- 高石恭子 2003 大学不登校の事例を通してみたひきこもりへの援助 甲南大学学生相談室紀要第10号 45-56
- 高石恭子 2006a ひきこもりと不本意就学の学生相談室利用者に占める比率の変化 甲南大学学生相談室紀要第11号 15-27
- 高石恭子 2006b ひきこもりの過去と現在 伊藤美奈子編 朝倉心理学講座16「思春期・青年期臨床心理学」所収
- 鶴田和美 2006 学生相談で語られる学業と研究の話題 鶴田和美・齋藤憲司編「学生相談シンポジウム—大学カウンセラーが語る実践と研究—」培風館 31-59

ABSTRACT

Some Discussion about Nurturing the Students from viewpoint of Clinical Psychology

TAKAISHI, Kyoko

Konan University

This paper is the one that the significance of “nurturing function” in today’s university education was discussed. The author considers the following three points of raising: (1) we should recover the nature of cultivating or nurturing individuality among various meanings of raising next generation. (2) we should re-understand the act of raising from the viewpoint of relation with the person brought up and the person who raises. (3) we should take the aspect of “generativity”.

The author says that the main reason why bringing up the student becomes difficult is in the extinction of the initiation ceremony. In the background of the extinction, it is assumed that there is a “linear view of life” dominant after the arrival of modern age. It becomes difficult for modern people to experience existential change from the child to the adult.

In conclusion, it is important to consider about nurturing the students by taking “the death” in view: that is, to revalue the “cycle-view of life”. Because efficiency principle spreads today, such a nurturing function is especially requested in the student counseling system.

Key Words : nurturing function, generativity, cycle-view of life
